平成 30 年 4 月 1 日 発行　第 23 号

目　次

**巻頭言**
会長就任にあたり
寺池 尚孝 …… 1
**陶芸家のひとりごと**
交趾焼について
中村 正史 …… 2
**陶芸道中いざ凝り気**
モグラのツブヤキ
玄 平 …… 4
**私の作品自慢**
感情を土に託して
曽根 恭子 …… 7
**陶芸技術ノート**
色化粧土について
寺池 尚孝 …… 10
**展覧会見聞録**
常滑紀行
今井 眞正 …… 12
**活動報告** …… 14
**会員便り** …… 15
**編集後記** …… 16
**付録**　会報 投稿のしおり …… 17

編集委員会
委員長　今井 眞正
委員　谷口 良孝、増田 淳三、
片岡 俊彦、布目 温

## 巻頭言

# 会長就任にあたり

会長　寺池 尚孝

京都・やきもの倶楽部会員の皆様、この度、今井会長退任に伴い、新会長に就任させていただきました、清水焼団地で作陶しております寺池尚孝です。今井前会長のように、ぐいぐいと引っ張っていくタイプでは無いので、今まで以上に皆様の助けをお借りしないといけませんが、この会が有意義で楽しい会になるよう努力いたします。ご協力のほど、よろしくお願いします。

あまりご存じない方もおられるかもしれませんので、簡単に自己紹介を致します。

昭和 47 年生まれの 46 歳です。大学卒業後、京都府の職業訓練校・京都市の工業試験場を卒業して、父の元で作陶活動を始め、現在に至っています。所属している会としては、日展（会友）・日本新工芸家連盟（会員）ほか、各種青年会活動にも参加しております。また、清水焼団地協同組合では理事を務めさせていただいております。先日、もっと積極的な清水焼団地への関与を希望される声をお聞きしましたので、協力を働きかけていきたいと思います。

さて、長年の懸案であります会員増強には何が必要なのか。体験イベントをする？ 展覧会をもっと増やす？ 特典をつける？…… 何をすれば良いのでしょう？ 会員の方が一人お友達をお誘い頂き、入会していただければ、単純にそれで会員が倍になりますよね。でも、そうはなってない

「こんな楽しい会やし、ぜひ入ってよ！」 そう皆さんに言っていただくにはどうすれば良いのか？　私たち役員だけではアイデアにも限界があります。やきもの倶楽部でこんなことしてみたい！ こういう情報が欲しい！ また、ここはこう変えて欲しい！ 実現不可能と思えることでも結構です。会員の皆様のアイデアをください。京都・やきもの倶楽部の事務局にファックスしていただければ良いですし、私に直接ご連絡いただけるならそれでも結構です。

京都・やきもの倶楽部
FAX：075-593-8120
寺池尚孝
Mail：n.teraike@gmail.com

年中無休で皆様のご意見お待ちしております。個人的には今年度は、陶磁器以外の体験をできればいいなと思っております。また、年間スケジュールが決定しましたら、ご案内させて頂きます。

皆様、一緒に楽しんで会を盛り上げていきましょう。よろしくお願いいたします。

中村翠嵐 作　数茶

## 陶芸家のひとりごと

### 交趾焼について

陶芸家　　中村 正史

私は、交趾焼・翠嵐工房に職人として勤めており、作家・中村翠嵐は私の叔父にあたる。工房では交趾の技法を用いた陶磁器を製造しており、作品の大半を茶道具が占める。

陶器屋というのが家業であったが、仕事場と住居は別で離れていたため、幼い頃から陶芸が身近にあったわけではなかった。工作が好きだったが、芸術よりも科学の分野に興味があったため理系で進学し、大学では電子工学を学んだ。その大学で茶道部に入ったことで初めて交趾焼と出会うことになった。茶道部には部の備品として、翠嵐作品の数茶碗が使われていたのだ。色鮮やかなその茶碗たちは明らかに茶席の中でも目立っていたし、現代的で、侘び寂びとはまた異なる良さがあった。何がどう良いのか？説明されなくても分かり易いカッコ良さを感じて、こんな作品だったら自分も作ってみたいと思った。

大学を卒業した後は京都府立陶工高等技術専門校で焼き物の基礎知識とろくろ成形を学んだ。全くの素人だった私は、土揉みもデッサンも出来ずに苦労したのだが、焼き物の製造方法を色々と学ぶにつれて、焼き物の中でも交趾焼は特殊でマイナーな技法であることを知った。茶道の世界では重宝されている焼き物だが、取り組む人の数が少なく、専門校にもノウハウが蓄積されていなかった。

陶器では、本焼焼成の釉薬では鮮やかで光沢感のある色彩は中々出せない。専門校生の頃、九谷焼の人間国宝、徳田八十吉や吉田美統作品が好きだった私はすでに上絵具（低火度釉）を用いた作品に惹かれていたのだろう。上絵具で絵付けの実習をしたときに、その鮮やかさを見た誰かが言った。

「この色を陶器の全体に塗って、釉薬みたいにすることはできないのかな？」

その発想はまさに交趾焼である。交趾焼は釉薬を掛けずに本焼きの温度で焼き締めをした生地に、上絵具で全体を塗っていく。そのまま焼成したのでは、三彩のように流れて色が混ざるので、イッチンという枠を作って色を区切っている。

交趾焼の製造工程は大きく三つに分かれる。それぞれに熟練を要し、工房でも部署が分かれているが、私は色付けを主に担当しており、仕事を始めてから 15 年が経った。細かい図柄も、広い面も全て筆を使って手で塗り上げるので、しっかりと色彩を出し、均一に綺麗に塗るということが技術の目標になる。上絵具は糊剤で溶いて水分量を調整して使用するのだが、水分量が少なく、コテコテの絵具では当然のことながら、筆ムラがつきやすくなる。逆に、水分量の多い絵具になると、塗り易いのだが、薄くなり焼成しても色が出ない

蓋置の完成作品 と 焼き締め生地

・生地の成形

・イッチン描き

・色付け

ことがある。目で見える色ムラが無くなるまで、塗っては焼成を何度も繰り返すのだが、作業性が良くて、色もしっかり出るイイ絵具の調整は作品によって異なり、経験と勘が頼りになる。絵具の調整、筆選び、そして筆の動かし方が技術の三大要素である。始めのうちは、自分がどれくらいの濃さで絵具を塗っているのかが分からず、薄すぎて何度もやり直したり、逆に濃すぎて絵具がイッチンの枠をオーバーして流れ、作品をダメにしたこともあった。どちらの失敗も経験して、良い加減が分かるようになる。また、作業が早くなると、濃い絵具を使えるようにもなってくるのだ。

作業風景

工房では、未熟なうちは図柄の中の色付けから始めることになる。細かい部分は筆ムラが目立ちにくく、簡単なためだ。慣れてくると、徐々に広い面を塗れるようになってくるが、広くなればなるほど難易度は上がる。交趾焼作品の見どころとして、イッチンで全体を細かい図柄で埋められている作品は、実は手間はかかるものの、絵具が流れるリスクは少なく、塗る難易度としては低い。逆に広い面をムラなく一色で仕上げている作品はとても難しい。

中村正史 作　交趾雪月花茶碗

中村正史 作　交趾稲穂水指

中村正史 作　交趾百花ぐい呑み

近年、交趾の技法に取り組む作家は増えてきており、お茶人さんでなくても交趾焼を知る人は多くなってきている。上絵具の鉛問題や、耐久性など、解決しなければならない問題はあるのだが、技法に、そして用途に様々な可能性のある焼き物だと思う。お茶席のニーズに合った作品を作ることはもちろん大切だが、交趾の色彩を駆使してできるあらゆることにチャレンジしていきたい。

## 陶芸道中いざ凝り気

# モグラのツブヤキ

会員　　玄　平

陶芸を始めて今日まで足掛け 50 有余年。歯の抜けた垢抜けしないオッちゃんの課外授業で訪れた秋の修学院・詩仙堂が今では懐かしい思い出です。伸びた鼻毛など全く気にしないそのオッチャンが走泥社で活躍中の八木一夫さんだった。単位を取るための土いじりの後、45 年のブランク。延べ実質 7 年の陶芸歴です。

初心者の壁というのでしょうか只今初級スランプの穴の中です。そんな駆け出しの穴の中からの小さな叫びです。浅学非才、知識不足を顧みず会報に寄稿する厚顔無恥の大胆さはやはり釜に入らないと治りません。桁ハズレの的ハズレは寛大にご容赦ください。

その土地その土地で育まれてきた焼きものにおける伝統的な陶芸。一方オブジェ陶などの前衛陶芸。芸術として焼きものは今や大きな二つの流れとなって、それぞれに課題を孕みつつ次代に向かっていると言えるように思います。前者が課題としているだろう伝統の壁。それは長い歴史基盤に軸足を置き、さらに時代を超えていく概念打破と進取の技術革新と言う事でしょうか。一方、後者は立体造形美の追及とそれを裏付ける焼きものならではの主体性の確保と言う事でしょうか。そこには土と薬と焼きというベースがあります。

さて、モグラの頭打ちスランプは、ボクの場合、焼きものでオブジエを制作するとき、立体造形・彫刻との差別化をどのように図るかということが課題です。そしてその課題を克服する焼きもの知識と経験が残念ながら乏しいというジレンマに起因しているようです。陶土を使って形だけを作るなら粘土や油土でよく施釉や焼成の手間に意味がなくなります。なぜ陶芸なん？ということになります。モグラの叫びはそんなところなんです。

「花器　たまゆら」

「BOLT NUT」

### ■ 孫人形から始まりました。

7 年前やきものに興味をもち、土をこね始め、食器や花器を作っていました。そんな中、孫をモデルに作った陶人形が身内限定で好評で、作り込んでゆくうちに表情や仕草を工夫することが楽しくなりました。埴輪の人形の素朴な土味が最適と、

赤土を無釉薬焼き締めで仕上げたり、化粧泥に艶消し透明釉を吹いたり、専ら女房の評価を気にしながらの楽しい制作でした。しばらくして新聞欄に「“みやこめっせ” でプロアマの陶芸展」の記事に遭遇したのです。

厳しい審査を見事クリアーして入会を許されました。先輩会友や先生からやきもの倶楽部の経緯など聞くうちに触発されたか！勘違いしたのか？勝手に創作意欲を発動して作陶に勤しみました。

「輪の輪」

「ひねり筒」

「陶人形」

## ■ 何で焼き物なん？

作品はオブジェ的な、中でも形のオモシロさを求めたものが多くなりました。孫人形や、やきもの経験からは当然の帰着とも言えます。まさに登り始めた峠の入り口です。いろんな形の作品にチャレンジしてきました。成型技術も作品の生命だろうという訳ですね。結局その頃は釉薬や焼きの手法を脇役のように捉えていたのです。「何でやきものなん？」「FRP でもええんちゃう？」にぶつかるのは時間の問題でした。やきものの特性を考えることが課題となりました。

## ■ 未だ半熟の陶芸観ですが

やきもの特有の制約の中でヤキモノならではの味に偶然性があると思いますが、二つと同じものがないという魅力でしょうか。それは土の可塑性がもたらす偶然の形、更には自然釉が持つ独特の素朴さ、そして釉薬が高温で変化する妙、窯変の人の手を離れた神業、といったものでしょうか。国宝、油滴天目茶碗の見込みに拡がる宇宙は人が作ったと言うものでなく当会報の「炎」、火の中の出来事は単に偶然の化学変化という言葉を超えた神の技があると言った方が納得できます。やきものの特性そのものでしょうか。まさに窯の中はレッドホール！です。

「輪廻の渦」

## ■ 菊練り３年焼き８年

陶土の可塑性は表現を大きく広げてくれます。しかし、土は生きものだと誰かの言葉、未だその息遣いに触れてはいませんが、何回となく土との折合をつける大切さは解らされてきました。特にタタラ成形の場合顕著なようです。意外と素直に形ができて１週間､素焼き窯入れ直前にグシャッ。素焼き窯の中でドカーンと爆発一揆。しばらく従順に無言かと思えば本焼き後でビシッ！自然の理をシカと学べとの警鐘乱打は加齢とともに耳鳴リを後押ししているようです。

菊練り３年焼き８年と言われるか存じませんが、「陶土は練ることが肝心や。菊練りは 100 回以上が必要でっせ」と陶芸材料店で出会った老人が教えてくれたのが 7 年前でした。土の声を聴くなんぞは 10 年早く、いつも陶土との示談交渉です。

素焼き前に崩壊した作品

## ■ 割れても陶に組みせんとぞ …

一方、意外性サプライズとも言うべきものがその作品の生命となっている、例えば三島喜美代さんの印刷物をやきものにした作品などは、固定観念を覆す 60～70 年代のコンセプチュアルアート品だと思いますが更に割れるという焼き物の特性が危うさを孕みオモシロイという作者の感性を刺激し支えているのでしょう。

物理的衝撃で割れるという危うさも焼き物の特性でしょうか。金継ぎ茶碗の魅力も其の辺に起因していると考えるのは穿った見方でしょうか。

「メビウスの道」

## ■ 機能美も焼きものの特徴

土器の時代からなる長い歴史の中で、その土地の生活用具として培われた焼き物が、やがて民芸として美術的価値を得た背景には、民衆の計り知れない生活時間､そしてその中で必然的に生まれ、また淘汰されてきた用の美、機能美があります。これも焼き物ならではのものでしょう。そこには人間工学的な機能美というだけでない、人々の生活の声、生命の声への感嘆といったものが芸術性として今､鑑賞者の心に共鳴を与えるのでしょう。茶陶に関しては、ワビからサビと禅の精神世界に広がるものゆえ一言もありません､一言固辞です。

花器や大皿に描かれた見事な図柄、絵画的技法や、壷に施された精微な彫り・象嵌には匠の技が厳然とあります。まさに長い時間と経験の上に生まれたものでしょう。機能美と加飾を極めた技にただ感嘆するばかりです。匠の技、陶魂といえる職人技がそこに息づいています。

酸化・還元・炭化など焼きの工程もまた焼き物特有のものですが、小生の頭では酸欠状態でまだ生焼きです。土と炎をコントロールする技術。その中にある偶然性（この場合、偶然と言うかどうか）は経験が大きく物を言うでしょう。もし AI の作陶ロボットが 3D プリンターを駆使して AI 窯で焼成すれば絶品の作品が出来るか？を肴に居酒屋で語ることがボクの限界です。

「群像」

2017 京展　　「つむじ風」

■ いざ！

黄金比が普遍的に安定感や心地よさ、美しいと感じさせることは真理でしょう。また、民藝の魅力が機能美から派生し、観る人に共鳴を呼び、癒しや和らぎ・感動を与えることも事実です。日本人ならではのワビ・サビ、更には洒脱や機知・粋といった感性も作品の構成要素として重要なものです。作品が語る！としても背景にある制作意図も大事ですし、作品名・タイトルが絶妙というのもアリでしょう。きっと。

扨、いよいよここから先、あの峠を目指して、いざ進まんの時、あの頂きは一つですが、どうやらその先に二つ三つありそうです。焼きものの特性を踏まえながらオプジエ陶を作っていきたいと思います。釉薬の化学変化がそのカタチをして見事に調和強調されているようなモノ。カタチのオモシロさに偏重すると無彩色の仕上げになりがちです。カタチのオモシロさが焼成を経て一段と輝きを増すといったモノを目指したい。少し理屈っぽくなりますが、「この形はあの釉薬、そしてあの高温のサポートを受けて作り出せました！」「この釉薬がこの形を際立たせている！」といったものを構想しながら作陶したいと立ち上がった時、傍らの乾燥中の曲管オプジエが音を立てて崩れました。

創作は理屈っぽさを嫌うようです。

2018 京都・やきもの倶楽部 作品展　会長賞
「Nipponiterra-X」

## 私の作品自慢

# 感情を土に託して

会員　　曽根 恭子

この度は「私の作品自慢」への寄稿のお話をいただき、ありがとうございます。これまでに自作の作品について文章で振り返ることは少なく、一瞬戸惑いましたが、よい機会をいただきました。

初めて土に触れたのは 28 歳のときでした。結婚のため 24 歳で京都へ来ましたが、古都京都で

生きるのは難しく悩む日々が続きました。そして「なにか、この街でなくてはできないことはないか？」と思ううちに、美術の好きな私は京都市美術館で日展を拝見したのでした。そして工芸の展示室で楠部彌弌先生の作品を拝見し、白い清楚な生地にマットな華やかさを奏でる花の文様に感銘を受けました。その時、楠部先生のキャプションには黒い小さなリボンが付されていました。楠部先生の作品を拝見したことをきっかけに、その後、谷口良三先生、正典先生にお出合いすることになりましたが、不思議なことに谷口先生のお宅のちょうど裏表に楠部先生のお宅があることを知って、驚くとともにご縁を感じました。

あれから 30 年余り、多くの先生方、先輩方よりご指導をいただき、それが励ましとなり、今日まで陶芸を続けることができました。

振り返れば 30 年とは早いものですが、ここにある作品の一つ一つに私自身の思い出も刻み込まれてきました。作品は私自身の自閉的な「ひとり語り」であり、私の中の私、つまり内言語の塊のようなものです。ご覧になった方にご理解いただけるかどうか？は作ったあとの問題でした。

しかし、最初はやはり食器づくりから始まりました。伝統的な技法をひと通り試し、食器はすべて自作の作品で！揃えていくうちに、食卓は随分華やぎました。5 年ほどは食器や花器を作って楽しみました。

ところがしばらくして、白い粉引きの生地にカンディンスキーのモチーフをデザインした色絵の平鉢が、美術コレクターの方の目に留まり、譲って欲しいと言っていただく事態が起きました。その作品には少し気になる点がありましたので、再度作り直し、お届けしました。後日お招きがあり伺いますと展示室にはドガの〈踊り子〉(素描画)、マチスのパステル画、ナンシー・ドームの花瓶、ガラス張りの床下にはアメリカの著名なガラス彫刻家デイル・チフーリ氏の〈シェル〉のオブジェが収められており、他にも美術館でしか見られないと思っていた作品がズラリと並んでいました。

私のカンディンスキーをモチーフにした色絵の作品〈Peaceful〉は、染色家の三浦景生先生の色絵陶板の隣に、作品が額に貼り付けられた装丁で掛けられていました。このような鉢を額装にするという発想に驚くとともに、世界的にも知られる作品の中に置いていただくことを直ぐには実感できず、大変恐縮いたしました。このコレクションの展示室は有料で鑑賞することができました。若かった私にはこのような現実は奇跡！が起こったかのようなお話でした。

もともと絵画鑑賞、特に抽象絵画が好きでしたので、それからしばらくはカンディンスキーをモチーフにした小品を作って楽しみました。カンディンスキーのモチーフはカラフルで色絵にはよく合いました。

第 10 回 陶芸アマコン大賞　努力賞
「セレナーデ」

その後は、作陶する人なら誰もがぶつかる「オリジナリティ」とは何か？世界に一つしかない作品を！という難題にぶつかり、何年も試行錯誤しました。しかし、自分の窯を持っていないため釉薬を試すことができず、陶芸の楽しみにも限界がきました。そして悩んだ末に思い至ったのは、自らの考える「フォルム」に「詩心」を忍ばせることでした。その結果生まれたのが陶人形とチューリップのシリーズでした。土に想いを託すことは大きなよろこびとなりました。女性を表現した陶人形〈セレナーデ〉（小夜曲）は第 10 回陶芸アマコン大賞において努力賞をいただきました。

チューリップシリーズの始まりは、オーク材を使って焼き締める穴窯の作品でした。この作品は高低さまざまなチューリップを並べたインスタレ

ーションで、意外にも土味と表現がマッチし、しなやかさの中にも力強さを感じる作品となりました。この作品において第８回陶芸アマコン大賞・努力賞をいただき、ようやく表現することの楽しさを味わえるようになりました。

第８回 陶芸アマコン大賞　努力賞
「チューリップファミリー」

次に青磁のチューリップが生れました。京都・やきもの倶楽部第２回作品展に出品の湖水に浮かぶチューリップです。水中に半身を沈め、花の精が浮かぶとも沈むとも定まらない危うい姿で咲いているオブジェで、「オフィーリア」(ジョン・エヴァレット・ミレイ画)のイメージを作品にしました。しかし、この作品は想いが先走り、「葉の形状が曖昧」と作品展講評会において先生方より厳しいご指摘を受けました。想いを形にするまでの想像力と技術力が足りませんでした。

そして、土に感情を！たとえば舞踏のような表現はできないものか？と思いを巡らすうちに、白いマット釉を身に纏い、感情を表出して躍る「白いチューリップシリーズ」が誕生しました。

この白マット釉は長年お世話になっている先生

第２回 作品展　「浮遊する花の精」

の調合によるもので、焼成後にはきらきらと輝く雪の結晶のような質感が生れます。また、チューリップの花の口縁部は焼成時に縁の釉薬が切れ、下から淡いグレーのアウトラインが現れます。そのラインによってチューリップの造形がより立体的に、白く浮き上がるように見えます。

このような釉薬の輝きと焼成の作用によって、白いチューリップは稚拙ながらも、なにかしら静謐な印象を得ているのだろうと思います。加えて、どの作品においても施釉の乱れもなく焼成できたのはもちろん先生のお支えがあったからです。

第１回作品展　特別賞
「デュエット」

第 5 回作品展　奨励賞

「Lonely Spring」

白いチューリップでの受賞は第 1 回作品展出品の寄り添うチューリップ〈デュエット〉（特別賞）と第 5 回作品展出品の摘み取られた花たち〈Lonely Spring〉（奨励賞）と合わせて 2 作品となり、感情をテーマとした作品にご理解をいただき、大変うれしく思います。

ここで、「なぜチューリップなのか？」ですが…。チューリップといえば、日本では幼い子どもたちの花というイメージですが、ヨーロッパにおけるチューリップはアールヌーボーのモチーフとしても使われます。花や葉、茎のしなやかに伸びる曲線は、感情を表現するモチーフとしてピッタリ！に思え、その容姿に憧れました。

第 5 回作品展　「Sleeping Alone」

最後に、もう一つの白いチューリップ〈Sleeping Alone〉です。葉の形状が未熟で技術的にもうひと工夫足りないと、自分でも悔いの残る作品です。そのため長い間押し入れの中で眠っていました。まさに Sleeping Alone でした。しかし、今回の作品展においてその眠りから解き放ち、華やかなライトの下に…。作品は恥じらいつつもうれしそうでした。

## 陶芸技術ノート

# 色化粧土について

陶芸家　寺池 尚孝

私は、普段製作するものの他に、趣味の延長線上で製作してきたものが多々あります。自家製スピーカーであったり、ランプシェイドであったり、イチゴの置物だったり……。

自家製スピーカー製作の際は、長岡鉄男氏の著書を中心に、他の冊子も参考にしながら色々なスピーカーを製作しました。現在手元には、完成品は残っていませんが、スピーカーユニットはありますので、また近々に製作しようと思っています。

イチゴの置物に関しては、写真 1 に示すようにイチゴを粘土で製作し、素焼きしたものに色付けをしています。その際に使用しているのが、ポーセレン 150 という絵の具です。こちらの方は 40 色以上種類もあり、食器にも使用可能で、150 度のオーブンで 35 分焼き付けば剥がれなくなるという便利グッズです。ただし、オーブンで焼き付ける際には非常に臭くなりますし、厚く塗ると泡を吹いたり塗りムラが目立ったりもします。しかし、発色はとても綺麗で、私の友人の子供が、イチゴと間違えて口に入れてしまい、ひと騒動あったりしました。焼き付けなくても、一日置けばべとつきもなくなるので、口にする食器ではなく置物に使うくらいなら、オーブンを使わずに定着させられるので、便利です。

写真 1. ポーセレン 150 で彩色した果物

ランプシェイドの制作には透光性磁器を使用しています。透光性磁器には可塑性(成形しやすさ)が無い為、泥漿にして石膏型で成形していました。透光性磁器の価格は、普段使用する土の 10 倍近くしたため顔料を泥全体に入れるわけにもいかず、そうかと言って表面に釉薬を施し、色をつけると透光性が損なわれることになります。また、顔料を入れること自体でも、透光性を損なうことになります。

写真 2 は透光性磁器に顔料を混ぜると、どのような色になり、また透光性が維持できるかを実験したものですが、顔料を入れることにより、かなり透光性は失われる結果となりました。

どうしようか悩んでいた時に、友人に勧められたのが前述のポーセレン 150 でした。ただ、やはりオーブンで焼けるとかいうものを、普段の商品に使用することには抵抗があったので、着色には従来からの釉薬または色化粧を使うことにしています。特に、色化粧で着色することが多く、様々な色の化粧を所有しています。

私の場合、化粧に使っているベースの泥は白土 2 に磁土 1 を混ぜたものを使用し、そこに顔料を混ぜております。まずは、顔料に CMC を加え、乳鉢で 10 分以上よく擦り、そこに泥を少し加えて数分擦る。この作業の繰り返しで化粧土を完成させます。化粧土に CMC を加えることにより、伸びが良くなり、塗りやすくなります。

色化粧土使用の利点としては、最終焼き上がりの色が目で見てわかりやすく、顔料の量を変えることで濃淡を出すことも可能です。特に、黄色は様々なトーンの黄色があり、顔料による変化も楽しむことができます。

また、私はよく使用していますが、色化粧土を塗り重ねた後、彫刻刀やカンナで表面を削ることにより、漆器の堆朱のように模様を描くことも可能です。写真 3 では、最初に塗るものから順に青・

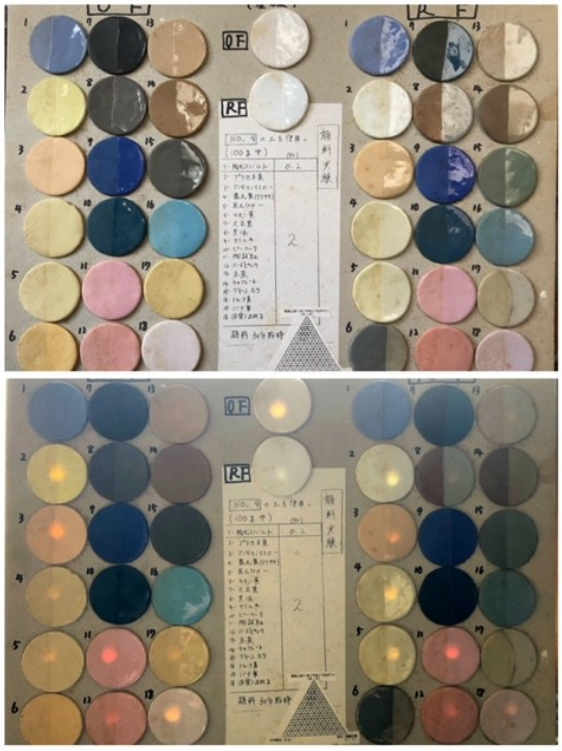

写真 2. 透光性磁器に種々の顔料を加えて作った試験片。
上段：表面からの照明で撮影
下段：裏面からのスポット照明で撮影
濃い顔料ではほぼ透過性が無い

写真 3. 多層化すれば彫る深さで色合や文様が変化する

黒・黄・黒の順に塗り重ね、一度真っ黒な状態にしてから、文様を出したい場所を削ることにより文様を描いています。

化粧土を塗り重ねるタイミングとしては、ちょうど高台などを削るくらいの硬さの時に筆で塗るのが良いと思います。表面が乾きすぎて硬くなっていると、化粧がうまく素地に乗らず剥離してしまう原因となります。またやわらかすぎると黒のような強い色が混ざり込んで、色が汚くなってしまう原因になります。逆に、削る時は硬くなりすぎると、粉っぽくなり色も混ざりやすくなってしまいがちです。

このように、私が筆塗りを利用するのは、塗り重ねることを前提にしているのもあり、筆で塗ることによって微妙な厚みの調整もできますので、文様の幅に変化を求める際などにも有効です。陶芸材料店に行くと、様々な顔料を小分けして売ってくれます。焼成のサンプルも置いてあるので、それを参考に一度顔料を利用して、化粧土をつくってみてはいかがでしょうか？

## 展覧会見聞録

### 常滑紀行

陶芸家　　今井 眞正

六古窯の一つとされる常滑は、平安時代の後期から焼き物が焼かれていた日本でも有数の産地で、平安当時には他の産地でも見られるように壺や瓶が焼かれていました。知多半島の各所に窯跡が点在していますが、当時は相当量の製品を作っていたようです。室町時代に入ると、次第に生産地が常滑に集約されるようになってきたようです。どこの産地もそうであるように室町時代後期から陶器はいろいろなものへと発展していきます。京都はその中でも例外なのですが…。

この度は、この常滑を私の兄のような存在でもある水上勝夫さんの案内で、やきもの倶楽部の皆さんと訪ねることとなりました。

中部国際空港（セントレア）が、常滑市にできてから名古屋からの便が良くなり、車でもほとんど高速道路で京都から2時間程の距離になりました。今回は名鉄常滑市駅で集合し、まずはお昼の腹ごしらえということで、案内いただいたのは、なんと大きな大きな窯の中でした。

巨大な窯中でフレンチ昼食

常滑では、江戸時代後期から、土管の産地として有名で、明治初めから東京近郊の埋め立て地の需要をきっかけに、建築物の近代化が進み、この土管は､爆発的な大ヒット商品となったようです。明治後期からは焼成の効率化が進み、倒炎式の石炭窯が開発され大量に土管が焼かれていました。その窯はその中でバレーボールぐらいできそうなぐらいの大きさで、内部は煉瓦が焼きしめられ、その表面には、釉薬がべっとりと熔けてまるで大きな壺の中といった風情で、楽しくランチタイムを過ごさせていただきました。

昼食後は、INAX ライブミュージアムを訪れました。ここは皆さんよくご存知の衛生陶器のメーカー伊奈製陶で、INA → INAX → LIXIL と名前を変えましたが、TOTO と並ぶ日本で有数のメーカーが運営する美術館です。その中には、「世界のタイル博物館」、「建築陶器はじまり館」や「資料館」、企画展示をする「土・どろんこ館」等と体験型施設や大きな石炭窯等立ち並ぶ、やきもののテーマパークのような施設です。その中央には、大正時代に建築されたという大きな煙突が

シンボルのようにそびえ立っています。ここを学芸員の流暢な説明を聞きながら案内していただきました。

大正時代の巨大煙突

興味深かったのは、「建築陶器はじまり館」で、伊奈製陶のもう一つの主力商品である建築用陶器の歴史と流れについて展示された美術館です。

明治の終わりから昭和 30 年頃にかけて、よく用いられたのは、タイルと「テラッコッタ」と呼ばれる立体装飾陶器用の陶器でした。関東大震災

帝国ホテル旧館の伊奈陶製テラッコッタ

の後、それまでレンガ造りが中心の建物がより丈夫な鉄筋コンクリート造りの建物に変わってゆきましたが、その装飾として使われたのがタイルとテラッコッタです。あのフランク・ロイド・ライトが設計した「帝国ホテル旧本館」は、鉄筋コンクリート造建築と建築陶器による装飾の時代の代表的な作品となったようです。ライトがこだわったタイルの色は当時の日本にはなく、アメリカから取りよせることになっていたらしいですが、そのコストが余りにも高額で、何とか日本でつくれないかということでそれに対応したのが、伊奈製陶ということでした。またこのタイルの中には鉄筋が通るようになっており、非常に丈夫なものが開発されたということでした。この帝国ホテルの食堂にあった柱が再現されて展示してあります。その他、古い建物に時々見ることができるテラッコッタはギリシャやローマ時代から続く西洋の建築装飾の近代化バージョンで、アール・デコ調のものや、日本的にアレンジしたもの等、いろいろなものが展示してあります。

私も今まであまり勉強、研究したことはない分野でしたので、非常に有意義にお話をお聞きすることができました。

そしてもう一つ、駆け足で案内いただくことになったのですが、「世界のタイル博物館」も素晴らしい美術館でした。紀元前から現代に至るまでのタイルの歴史を展示した美術館で、特に 1 階部分はタイルが張られていた状況等も再現する展示室で、そのほとんどは当時のタイルをもとに忠実

復元された紀元前タイル

古代オリエント時代のタイル色

に新しく再現されたタイルで装飾されています。紀元前のタイル等は、きっちり造り過ぎてしまうとイメージが異なるために、わざとばらつきを作るために子供たちに制作を依頼したそうです。古代オリエントの物等も現存する釉薬がないため、調合には非常に苦労されたそうです。

その他、2 階には世界から集められたタイルが展示してありますが、残念ながら時間がなく、拝見することができませんでした。

このライブミュージアムをゆっくり観ようとすると半日ぐらいは必要だと思います。次回はもう少しゆっくりと見られるように、時間を取ってまた訪れたいと思っております。

水上さんは、昔からそうなのですがきっちりした性格で、いい加減なことができない性が、窯にも作品にも反映されていて、当日伺った穴窯も綺麗に築窯されており、整理整頓された窯場に小ぶりながらも、ガッチリと作られたその窯は水上さんそのもののようでした。当日は私たちのために、焼成した窯を出さずにそのまま置いておいてくださりその中を私たちに見せていただきました。

水上さんの作品はシンプルながらも、精緻な形に穴窯の熾きにうめて土の表情をできるだけ引き出してやろうという作品です。機会があればぜひ見ていただきたい作品です。また、個展など倶楽部通信で案内させていただきますので、足を運んでみてください。

水上勝夫氏築窯の美術品

全部で半日というスケジュールでしたので、後ろ髪を引かれるおもいで常滑をあとにし、知多半島先端部に近い海辺の宿に向かいました。そこでゆっくり温泉につかり、浴衣姿で総会をさせていただきました。3 年会長を務めさせていただきましたが、寺池さんに会長をバトンタッチすることとなりました。この後も、副会長として運営にかかわらせていただくつもりでおりますが、つたない運営で大変失礼をいたしました。

新会長を迎えてますます楽しく、有意義な会にしてゆきたいと考えておりますので、変わらぬご協力をよろしくお願い申し上げます。

最後に、修学旅行のように大きな部屋で、酔っぱらいのおっさんが枕を並べて寝させていただいたことは一生の思い出として大切にしたいと思っております（笑）。

## 活動報告

### 第 5 回京都・やきもの倶楽部作品展　開催

開催日：平成 29 年 10 月 31 日～11 月 4 日

第 5 回作品展が京都勧業会館“みやこめっせ”ギャラリーAで開催された。この場所での開催は 3 回目で作品展として定着してきた感がある。会期中は秋の京都観光をする内外の来客もあり、250 名以上の方にご来場いただき、盛会のうちに終えることができた。作品展には会員 24 名、賛助出品者 8 名のご参加を頂き、52 点が展示された。その内会員作品 44 点の中から秀作 8 点に、京都・やきもの倶楽部会長賞、副会長賞（2）、吉村賞、奨励賞（2）清水焼の郷賞（2）が授与された。贈賞式は同日市内で開催された懇親会の席で行われ、受賞者各々が喜びを語られた。

尚、展示設営は毎年の事ながら、今井先生始め先生方の大車輪でプロ並みの展示がなされ、アマチュア作品が一層引き立てられて展示された。其々の作品は専属カメラマン片岡さん自作の撮影機材を駆使したプロ級の撮影技術により、見事な図録が出来上がった。

## 常滑研修旅行 実施

実施日：平成 30 年 2 月 17 日～18 日

本年度最初の行事として、総会を兼ねて愛知県知多半島の常滑への研修旅行が行われた。当日は名鉄常滑駅での現地集合で理事 3 名､会員 8 名が、列車遅延トラブルが有ったものの無事集合した。時間待ちで駅構内の喫茶店に入ると、懐かしい鐘太鼓が置いてあり、尋ねると、なんと現役のチンドン屋さん、特別演奏もしてくれて、晴れやかに研修開幕となった。現地では当会の理事で常滑が本拠地の陶芸家水上勝夫氏に懇切丁寧にご案内頂いた。土管、タイル、急須から金のトイレ迄、幅広い陶の歴史とビジネスを深く知ることができた。詳細は本号今井先生の“展覧会見聞録”をご参照願いたい｡研修後は知多半島先端に移動し､総会、宴会と温泉で充実した研修旅行が無事終了した。

## 平成 30 年度総会 開催

開催日：平成 30 年 2 月 17 日

本年度総会は常滑研修旅行の初日に知多半島花の丸旅館で開催された。参加者は、理事 3 名を除いて会員 8 名とその委任状 18 名で会員総数(43 名）の 50%以上となり、総会は成立すると共に、議事案は全て承認された。本総会での主要議題は次の 2 点であった。

■ 新しい会長、副会長人事

会　長：寺池 尚孝
副会長：今井 眞正
副会長：谷口 良孝

3 年間当会を牽引していただいた今井会長が会長を退任され、今年度からは副会長として引き続きお世話頂くこととなった。会長には寺池前副会長が就任された。会長就任挨拶では、ご自身が清水焼団地協同組合の理事も兼任しておられることから、当会と団地組合の更なる協力関係を進めて行くとのご発言があった。

■ 第 6 回作品展の開催

今年度も作品展を開催することとなり、その期間と場所は下記の通りに決定された。

場所：京都市勧業館「みやこめっせ」
　　美術工芸ギャラリーA
期間：平成 30 年 10 月 29 日～11 月 2 日

# 会員便り

## 個展・グループ展・企画展・公募展
## （平成 29 年 10 月 ～ 平成 30 年 3 月）

京都・やきもの倶楽部に所属されている方々の展覧会で、会員各位の活動状況をお知らせするために設けました。掲載希望の方は、どのような規模の展覧会でも結構ですので、ふるってお申し込み下さい。用紙は、すでに配布しております「展覧会情報」掲載申込書の最新版（2017/11 発行）をご利用下さい。

平成 29 年

■ 10 月 31 日 ～ 11 月 4 日
<u>第 5 回 京都・やきもの倶楽部 作品展</u>
京都市勧業館 みやこめっせ
　美術工芸ギャラリー A（京都市）
京都・やきもの倶楽部

■ 12 月 13 日 ～ 12 月 19 日
<u>現代工芸美術家協会近畿会</u>
　<u>巧芸〈アート＆クラフト〉展</u>
近鉄百貨店本店 タワー館 11 階
　アートギャラリー（大阪市）
森田 隆司

■ 12 月 17 日 ～ 1 月 12 日
<u>改組 新 第 4 回 日展 京都展</u>
京都市勧業館 みやこめっせ
　地下 1 階 展示場（京都市）
市川 博一、加藤 丈尋、谷口 正典、
谷口 良孝、森田 隆司（以上、入選）

平成 30 年

■ 1 月 17 日 ～ 1 月 23 日
<u>第 5 回 陶美展　日本陶芸美術協会主催</u>
日本橋高島屋 6 階美術画廊（東京都 中央区）
吉田 貢（入選）

■ 3 月 24 日 ～ 4 月 7 日
<u>国際アマチュア陶芸展 伊万里 2018</u>
伊万里・有田焼伝統産業会館
　1 階 展示室（佐賀県 伊万里市）
増田 淳三（入賞： 優秀賞）

凡例
■ 開催期間
展覧会名
展覧会場（開催地）
出品者名（入選、入賞）

## 編集後記

平成 30 年度の総会が常滑の研修旅行も兼ねて開催された。本年度は寺池先生が会長に就任され新たな活動が始まる。寺池先生は清水焼団地協同組合の要職をご兼任で､団地のご協力も得ながら、会の一層の発展を期待したい。前今井会長には強力なリーダシップで作品展や楽茶碗研修などを牽引いただき、興味ある行事が多く開催された。ご尽力に厚く御礼を申し上げる。今回の常滑研修旅行も今井先生のひらめき案で、最初はどうなるかと不安山積であったが､多数の会員の参加も有り、見事に実現した。

常滑では冒頭から見た事もない超巨大な窯内に入り驚いた。ホストをしていただいた水上先生の格別のご配慮で常滑の陶製品ビジネス発展経過を始めて知ることが出来た。また、歴史を感じさせる先生の工房では先生自作のオカリナで見事な音楽をお聞かせいただき、陶と茶、陶と花、陶と食等とは違うジャンル楽しませていただいた。心より感謝を申し上げる。

帰路では太平洋に面した知多半島の先端の魚市場で買い物を堪能したが、美味しそうな干物をしこたま買って京都に帰り、ふと見たら京都宮津産とあった。どうして常滑まで行ったのと魚に問いかけては見たが……。

（編集委員　増田淳三）

京都・やきもの倶楽部 ホームページトップに戻る